オリジナル資史料に基づく古典教育の可能性

舟見一哉

一、はじめに

平成十四年度高等学校教育課程実施状況調査質問紙調査によると、古文・漢文が好きか否かという設問に対し、総数2270人のうち74.8％の学生が「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」と回答している。渡辺春美2005の指摘する通り、「古典離れ、古典嫌いに至っているという実態の報告は、戦後の早い時期からなされていたが、今日の実学志向と相俟って、その傾向は強まっている」とみて誤りない。古典離れ・古典嫌いが引き起こす種々の弊害は容易に想像されるが、国際化が進む現在こそ、自国のアイデンティティである文化・言葉・歴史等を知っておく必要があることは言うまでもなく、現在ほど古典教育が必要とされる時期はないように思われる。そこで本稿では高等専門学校という場に於ける古典離れを回避する一手段として、「オリジナル資史料」を用いる授業案を提案し、その実践報告と分析を行う。

二、高等専門学校における古典教育

古典教育は「受験古典」と「学校古典」に大別される（内藤一志1999）。「受験古典」とは、大学入試対策のために行われる教育を指し、品詞分解などの文法学習や内容読解のテクニックをその内容とする。「入試に出る古文単語」「敬語の見分け方」といった試験対策方法の教授を想像されたい。一方の「学校古典」とは、高等学校学習指導要領の「目的」がいう「古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典に親しむことによって人生を豊かにする態度を育てる」ことを目的とする教育である。

一般の高等学校は大学受験を前提としているため、必然的に受験古典が優先される傾向にある。大学入試科目から古文・漢文が除かれるケースも近年増えてはいるが、おそらくこの傾向は今後も大きく変わることはなかろう。それに対して高等専門学校では、一般の高等学校ほどに受験という枠組みに縛られることがない。高等学校学習指導要領にいう「古典に親しむことによって人生を豊かにする態度」を存分に教授することが可能である。先述の国際化と関連させるならば、国際的に活躍するエンジニアの基礎教養としての「自国の文化」を身につけさせることができる。高等専門学校における古典教育は、この点で一般の高等学校よりも深い教育を行えるわけである。

さらに高等専門学校の国語教員は、最先端の国文学研究を進める研究者でもある。教科教育学としての古典教育と、研究機関において行われる国文学研究とが乖離していることはすでに問題視されており（吉村誠2006ほか）、一般の教員による授業が、国文学研究の立場から言えば極めて危

一般科講師

ういものであることは事実である。その危うさを理解し、最も蓋然性の高い新たな研究成果を反映した授業が高等専門学校ではできることは、大きな利点と言える。

一例を挙げよう。卜部兼好『徒然草』の「序文」は大方の教科書に掲載されているが、その一節に次の著名な部分がある。

つれ〴〵なるまゝにひくらし硯に向かひて……

この「ひくらし」という四文字を如何に読み、訳すべきか。ある教科書・参考書では「ひぐらし」と読み、「一日中」などと訳されるが、ある本では「日暮らし」と表記され、読み方が明記されおらず、しかしながらやはり「一日中」と訳す。国文学研究・国語学の立場からは、『日葡辞書』(1603〜)に「ひぐらし」「ひくらし」ともに立項されておらず、「一日中」という副詞として「ひめもす(Fimemosu)」「みめむす(Fimemusu)」「終日(Xujit)」しか立項されていないことなどを根拠として、「ひくらし」＝「日を暮らす」と解釈するのが近年の通説である（小松英雄 1990 ほか）。受験古典では、そもそもこの部分が問題として出題される可能性が極めて低いために、とくに取り上げられることはない。

しかしながら、この「ひくらし」というたった四つの文字羅列からは、ひとつの大きな課題を学生に示しうる。「清濁とはなにか」という問題である。これは本稿で提示する「オリジナル資史料」を用いた授業とも密に関わる。そもそも文学作品は近世期に到るまで清濁を施すことをしない。したがって、清濁を施すこと（さらには句読点を施すこと）は言葉と文脈の解釈に直結する。「ひくらし」を「ひぐらし」とよむためには、相応の①理的根拠が必要であり、一語の理解には相当の研究が必要なのである。こういった事実を知らないまま、教科書や参考書通りに音読してすまして②まうと、耳慣れない言葉を羅列した文章を無批判に覚えることになり、③果として「古典はよく分からないから嫌いだ」という感想に陥りやすい。④ぜ濁るのか、その根拠と研究史を提示してこそ、言葉そのものへの関心は芽生えると考える。

⑤このように、国文学や国語学・言語学の研究成果を知っているゆえにできる深い教育――ひとつの問題点から派生し、言葉そのものへと関心を羽ばたかせることができることも、高等専門学校における古典教育の強みなのである。

以上、高等専門学校における古典教育が、一般の高等学校のそれよりも大きな可能性をもつことを述べてきた。その特徴を最大限に活かし、古典離れを回避しつつ深い古典理解を促すためには具体的に何ができるのだろうか。稿者はその具体案として「オリジナル資史料」を用いた授業を以下に提示したい。

三、オリジナル資史料とその教育効果

文学作品におけるオリジナルの定義は難しい。これがオリジナルである、というためには、著者が確定していることが前提となるが、古典作品では、著者が判然としない作品が大半だからである。かの『源氏物語』ですら、著者を紫式部と確定することは現段階でもできていないことは周知の通りであろう。では著者がわかっている場合のオリジナルとはなにか。著者自筆本が現存していれば、それがオリジナルとなろう（初稿本・再稿本の問題はひとまずおく）。このように厳密に規定していくと、古典作品のなかでオリジナルが存する例は極めて稀で、平安期成立の作品にオリジナルは現存しないといってよい。おそらく、冷泉家時雨亭文庫に所蔵される、藤原俊成自筆『古来風躰抄』が最古の資料になるのではなかろうか。そこで本稿では、紙に筆で書写された資料（江戸期までに限定する）を、活字化される以前の姿を残すという意味で「オリジナル」と定義する。

オリジナル資史料を授業に取り込む第一の目的は、学生の古典離れを解決することにある。古文の教科書・参考書には、前述のように活字化された本文が掲載されている。そのため一文字一文字は理解できるのだが、仮名遣いが現代と違い、聞いたことのない単語が並ぶことに、微妙な違和感を感じる学生が多いようだ。読めるけれど意味が分からない、しかし日本語である、というある種の矛盾が彼らのなかにはある。そこで、そもそも本来は活字ではないという事実、句読点や濁点がない事実を教えることで、彼らの抱く違和感がむしろ正しい情動反応であることを認めることからはじめることは、半ば強制的に、古文とはこういうものだと形式的に教える教授法よりも、古典嫌いを減らす作用があると期待されるのである。また、

実物を実際に触れることで「物」としての古典を知り、そのうえで内容へと入っていく方法は、活字本文からでは想像しずらい古典の世界をビジュアル化することに一役かうところがあると考える（絵入り本や装飾料紙を用いた写本であればその効果はより高い）。ともあれ、古典に対する興味を喚起することからはじめなければ、古典嫌いを減らすことはできない。即物的ではあるけれども、最も分かりやすい形で興味をひく方法として、オリジナル資史料には以上のような効果が期待されるのである。

さて、オリジナル資史料を授業に取り入れるにあたって留意すべき点が二点ある。第一点は装幀である。古典籍の装幀は、巻子本、折本、粘葉装、列帖装（綴葉装）、袋綴装、包背装、古筆切などと多様である。専門的な書誌学的説明は必要なくとも、紙同士を繋ぐ方法として、糊によるもの／糸によるものの二種類があること、形態としては、巻く／折る／綴じるという三形態にわけられることは示しておくことが望ましい。本と一口に言っても、時代や目的によってその姿が多様であることは、専ら製本された冊子本にのみ触れてきた学生にとって新たな知の地平を開く可能性が高いからである。第二の留意点は書写年代である。時代や書流によって筆跡は大きく異なる。さらに時代によって利用される紙にも変化が生じる。したがって、平安期から江戸期までの幅広い資料を用意し、それぞれの特徴を体感させることも必要である。

近年は印刷技術も発達し、精巧な複製本も作られるようになった。そのため、オリジナル資史料でなくとも複製本でもよいという向きがあるかもしれない。しかしながら、冊子として刊行された複製本では装幀を知ることができない。また、装幀まで復元した複製本であっても、やはり印刷物であることには変わりなく、オリジナル資史料のもつ、紙の感覚や墨の風合いは体感できず、とくに筆の動きや連綿の姿を感得するためには、オリジナル資史料こそが最適である。

以上をふまえて、稿者が行ったオリジナル資史料を利用した授業の成果を次に示す。今回は全ての装幀本を用意することができなかったため、一部に複製本を利用した。また、書写年代を幅広くカバーするために、古筆切（冊子本等の一部を切り取り観賞用に装幀し直したもの）を利用することにした。なお、実験的にマイクロスコープを用いて紙質の違いを測定する試みも行った（写真２）。

四、実践例とアンケート結果

１　実施日　2011/10/17、2011/10/21

２　対象　機械工学科二年Ａ組・Ｂ組、応用化学科二年、都市工学科二年　計一六〇人

３　単元　国語（古文）「和歌史　中古～中世」初回および第二回

４　資料

・筆者未詳真言儀軌問答　断簡　（奈良時代末期書写）

・伝源頼政筆古今和歌集　断簡　（平安時代末期頃書写）

・伝二条為氏筆古今和歌集　断簡　（鎌倉時代後期頃書写）

・伝飛鳥井雅綱筆古今和歌集　断簡　（室町時代後期頃書写）写真１

・伝富小路通治筆後撰和歌集　断簡　（室町時代後期頃書写）

・筆者未詳新続古今和歌集　袋綴装・零本　（室町時代末期頃書写）

・古今和歌集版本　（江戸時代初期刊行）　写真３

・筆のまよひ版本　（江戸時代後期刊行）

※和漢朗詠集巻子本　（複製）

※前田家本古今和歌集　綴葉装　（複製）

※粘葉本和漢朗詠集　粘葉装　（複製）　写真４

アンケート結果　一六〇人（無回答０）

①本物に触れることは、古文を学ぶ時に役立つと思いましたか。

ア　役立つ　122 / 160　76.3 %

イ　そうかもしれない　30 / 160　18.8 %

ウ　役に立つとは思わない　8 / 160　5.0 %

②本物に触れることは、古文を勉強するときに必要だと思いますか。

ア　必要だ　55 / 160　34.4 %

イ　そうかもしれない　65 / 160　40.6 %

ウ　必要ではない　40 / 160　25.0 %

③感想

・理科の実験のように国語にもこういう機会は必要と思う。

・教科書で読みやすくされた字を見るよりも、昔の人が書いた、昔の

書き方で見る方が読みにくい部分が多いけど、古文を読んでいるという実感があってよかった。

・博物館にしかないような本物を間近で見たり触れたりすることは、教科書の中だけで学ぶのとは違って、とっても興味がわいた。

・昔の紙は現代使われている紙と違って繊維が大きめに残っていた。

・実体験を通して古文を学ぶことができたので、もう忘れることはないと思う。

・実物を見ることでイメージが定着して授業も受けやすいと思う。

・勉強の上で必要とは思わないが、良い経験となった。

・本物を知らなくても勉強はできます。

・本物を触る事により古文を勉強することができるかと聞かれると、それはまた違った話であると私は思いました。

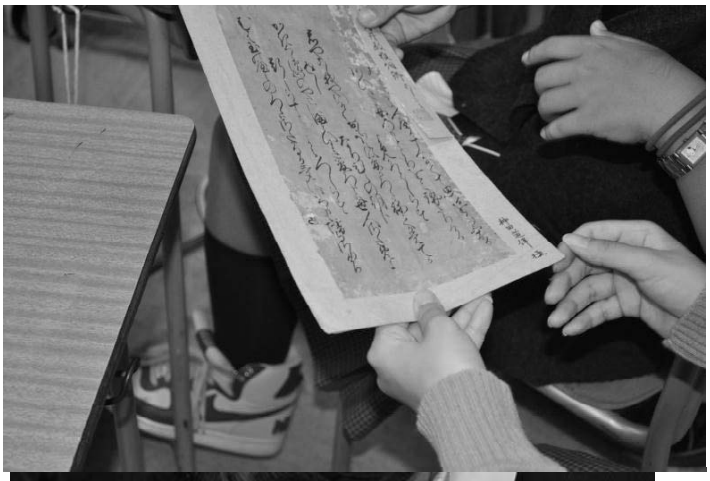

写真1　伝飛鳥井雅綱筆切

写真2　繊維調査

写真3　古今集他

写真4　和漢朗詠集

五、おわりに

アンケート結果から、オリジナル資史料が古典に興味を抱く入り口になり得る可能性が高いことが明らかとなった。特に実験・実習の多い高等専門学校においては、実物にふれ、観察する行為が学生の好みともマッチしたようである。想像以上に、オリジナル資史料が彼らに与えたインパクトは大きい。しかしながら、それはあくまで入り口に過ぎないこともアンケートによって判然とする。学習に際してオリジナル資史料が必要ではないと考える者の多さは、本物に触れることは楽しいけれども、その感覚と学習は別だという意識が根強いことを示唆している。したがって、オリジナル資史料を用いた授業ののちは、常に本物に触れた際の感覚を思い出させつつ進める授業となるように工夫しなければならない。例えば和歌の解釈を行う場合も、教科書のみではなくサブテキストとしてオリジナル資史料の写真を配布するといった配慮が必要であろう。その際にタブレット端末を利用することも有益であると考えるが、この点は今後の課題としたい。

彼らに必要なのは古典のビジュアル化と体感である。古典のビジュアル化はすでに国語便覧などによって補われてきた。今後はオリジナル資史料を加えることで、古典を体感する場を増やし、単なる学習ではなく、経験としての古典を教授する必要があると考える。

なお、近代文学作品においても、著者の自筆原稿というオリジナル資史料を用いることで同様の成果が期待されると考えるが、追って報告したい。

参考文献

・渡辺春美 2005.7「発見に導き、学び手を育てる古典教育」(『月刊国語教育』200)
・内藤一志 1999「〈学校古典〉と〈受験古典〉の関係」『月刊国語教育』19-9
・内藤一志 1999「〈学校古典〉と〈受験古典〉の違い」『函館国語』15
・吉村誠 2006.9「古典文学研究と古典教育」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』22
・小松英雄 1990『徒然草抜書』講談社学術文庫

＊“Japanese Classics Education Employing Original Materials”, Kazuya FUNAMI